

賛助会員の声**「イノベーション志向」**

フジテック株式会社 取締役会長 (昭和41年卒) 大谷 謙 治

昨年、「コンピュータに感覚を」との標語の下、文字、図形、音声などのパターン情報処理研究の系譜が、京都大学の総合博物館に展示されました。その案内用ポスターに、30数年前、坂井利之教授の研究室のコンピュータをバックにして長尾眞前総長を始め諸先輩とともに写っている我が姿を発見して、嬉しく、懐かしく思いました。当時、畳数枚分もあった大型コンピュータは、クロック周波数が数MHz、メモリーは数十Kバイトでした。現在私たちが机の片隅で使っているパソコンに対して、スピードは千分の一、メモリーは万分の一で、隔世の感がいたします。膨大なパターン情報処理のため、コンピュータ・ルームで何度も夜を明かしたことを思い出します。

私は、丁度30才を区切りとして、そのような研究者生活から、縁あって昇降機メーカーであるフジテック(株)に転身しました。まるで、異次元の世界でしたが、当時、リレーで制御されていたエレベータのコントローラを、IC化、LSI化し、ソフト化、知能化する技術革新の中で、技術者としてその推進に幾ばくか貢献できたかと思っています。

都市の高層化、高密度化に伴って、その縦(上下)の動線を司る昇降機の役割はますます重かつ大になってきました。高速化を追求する一方、より静粛で、滑らかな走行、正確な着床が求められます。多数のエレベータ群をいかに効率的に動かし待ち時間を短縮するか、人工知能が活躍する舞台となっています。ユニバーサル・デザインや用途に応じた意匠性などのニーズにも応えていかねばなりません。

一方、都市に潜む様々なリスクの顕在化に伴って、昇降機には絶対の安全と安心が強く要請されています。地震などの天災に対する安全の確保と復旧のしくみ、また人災に備えた様々なセキュリティ機能や信頼性の確保が求められるようになりました。私たちはメーカーとして、またメンテナンス会社として、このような社会ニーズの方向性をしっかりと見据えて仕事に取り組みねばならないと自戒しているところです。

さて、国の経済力は、人口×資本蓄積×イノベーションで決まります。これまで我が国は人口×資本蓄積の積に頼ってやってきました。しかし、人口は今や減少過程に入っています。現在、世界人口のシェア2%を有していますが、50年後には1%に半減すると予測されています。また、資本蓄積は労働人口の減少と高齢化に伴って、貯蓄を取り崩す人々が多くなりますから、これには多くを期待できません。従って、今後の我が国はイノベーションを拠り所として、先を行く米国、後から迫る中国に負けないようにしなければなりません。

その中心的な役割を担うのは大学です。学術・技術に関わる教育の質と量を一層充実いただくとともに、例えばイノベーションのための物の見方、考え方、それを開花させる技術マネジメント(MOT)、その成果を保護する知的財産管理、事業化のための起業プロセスなど、今後、カリキュラムとして検討いただく余地もあるのではないのでしょうか。そして、学生の皆さんには、それぞれの能力を高め、個性を磨き、イノベーションに参画する準備をしていただきたいと思います。

私たち企業人は、事業、RDと知財の三位一体経営をしっかりと推進していかなければなりません。国の“知財立国宣言”、そして“イノベーション25戦略”に歩調を合わせ、企業風土をイノベーション志向型に変えていくことが大事だと考えています。

米国宇宙協会が至極真面目に研究している“月まで届くエレベータ”や、我が国でも50年後に実現しそうな科学技術に挙げられている“宇宙ステーションと地球をつなぐエレベータ”など、現在ではSFの世界のものが、いずれ現実のものとなるのを楽しみにしている次第です。